

<西南学院大学大学院国際文化研究科>

博士学位申請論文審査報告書

◆申請者： 国際文化研究科博士後期課程 14DK001 平川 知佳

◆申請論文： 日本近代における遊郭の役割と娼妓の生活
—福岡県久留米市桜町遊郭を例にして—

1. 審査の経緯

上記申請者より、2019年10月15日（火）に博士学位申請論文が提出されたことを受け、事前審査委員会（主査：片山隆裕、副査：宮崎克則教授）を設置し審査を行った。審査結果を受けて、審査委員会は申請者に対して提出された論文の内容および形式上の訂正を指示した。申請者は、該当箇所についての加筆修正を行った上で、同年12月9日（月）、本審査論文を提出した。これに応じて、本審査委員会（主査：片山隆裕、副査：中島和男教授、宮崎克則教授）を設置し、審査委員各自で提出された論文を熟読した上で審査を完了し、2020年1月22日（水）に申請者を呼び、本審査委員会のメンバー3人で口頭試問を実施した。口頭試問では申請者に対してアドバイスをするとともに、いくつかの課題も指摘した。本審査委員会では、申請者の論文が博士学位を取得するに十分な水準に達していると判断し、同年2月3日（月）に本学大学院棟1階大ホールにおいて、公開審査（最終）を実施した。公開審査（最終）では、申請者は論文の概要及び論点を自ら収集してきた貴重な一次史料を使いながら報告し、出席者から高い評価を得た。公開審査には本学からだけでなく、九州大学、熊本県立大学、西日本短期大学など近隣の諸大学の研究者や、地元福岡市や久留米市にある新聞社の記者なども来場し、申請者の研究内容への多方面からの関心の高さを物語るものとなった。

2. 論文の概要と評価

申請論文は「日本近代における遊郭の役割と娼妓の生活—福岡県久留米市桜町遊郭を例にして」というテーマである。久留米市における遊郭の歴史を俯瞰し、桜町遊郭の誕生から発展、そして衰退に至るまでを追いかけて、明治期から昭和初期にかけての社会の動きと関連づけながら、一地方都市において遊郭がどのような役割を果たしていたのかを明らかにしている。また、桜町遊郭の内部にも目を向け、遊郭を構成していたモノや人々といったミクロな構成要素に着目して、遊郭独特の仕組みについての考察を進めるとともに、申請者自身が発掘してきた『娼妓所得金日記帳』をはじめとする貴重な一次史料の分析を行い、遊郭で働いていた娼妓の生活に肉薄している。

第1章「明治初期における近代公娼制の確立」では、久留米において近代公娼制がどのように確立されていったのかについて、実際に公布された「貸座敷等規則」及び「娼妓規則」に着目して考察を行い、近代公娼制の特徴を明らかにしている。第2章「明治・大正期における桜町遊郭：その成立と発展」では、まず、久留米市における遊郭設置をめぐる動きに着目し、そこでなぜ久留米市内の各町が競って遊郭設置運動を展開したのかについての考察を行うとともに、桜町遊郭の成立及び発展の過程と軍隊の設置との関係についての検討を行っている。ここでは、『軍人娼妓所得金日記帳』や当時の『福岡日日新聞』などの史料を用いることによって、軍人が遊郭を利用していた様子を浮き彫りにしている。第3章「大正・昭和期の戦時下における遊郭の役割」では、特に昭和初期における公認遊郭の衰退に焦点を当て、なぜ公認遊郭が衰退していったのかについて、特殊飲食店との対比から考察を加えている。また、戦時体制の強化の影響で、縮小されていく風俗業界に着目し、戦時下において、公認遊郭や特殊飲食店がどのような役割を果たしていたのか、そこで働く女性たちがどのような暮らしをしていたのかを、彼女たちの銃後活動も含めて明らかにしている。第4章「遊郭の仕組み」では、史料『全国遊郭案内』を参照しながら、桜町遊郭における遊興システムを確認している。そして、桜町遊郭を構成していた建物や施設、遊郭をめぐる人々といった遊郭の構成要素に着目しながら、桜町遊郭の成り立ちについての考察を行っている。第5章『娼妓所得金日記帳』にみる娼妓の生活』では、日記帳に記載された娼妓たちに関する情報から、娼妓の出身地や年齢に着目して、久留米市の遊郭にどのような女性たちが集められていたのかを明らかにするとともに、娼妓稼業を始める上で重要な取り決めであった前借金や稼業年数にも着目し、娼妓稼業の傾向について考察を行っている。『娼妓所得金日記帳』からは「小菊」と「かる多」という2人の娼妓の記録をもとにして、娼妓の生活実態に迫るとともに、娼妓の廃業時の動向と総稼ぎ高から、遊郭の経営実態にも迫っている。第6章「<自由>を求めた娼妓たち」では、自由廃業運動や待遇改善を求めてのストライキなど、娼妓たちによる自由獲得の動きとその限界について言及している。

申請論文は、久留米市の桜町遊郭について、時代的背景というマクロな状況を念頭に置きながら、ミクロな視点での「遊郭社会」の掘り起こしと娼妓の生活の分析に成功している。特に、申請者自身が発掘してきた『娼妓所得金日記帳』の分析には、娼妓たちの生活の苦悩やその背景がリアルな姿で語られている。これは申請者が研究者であると同時に、1人の女性として娼妓の生活へ向き合おうとしたことによる点が大きい。事実を語れる人々がなくなった現在、歴史を丹念に掘り起こす作業は、日本近代史、社会史、地方史などに対する多大な貢献が可能であることをうかがわせる。

一方で、近代日本における「国策と性」という極めて重要なテーマを扱いながら、以下のいくつかの点において改善の余地がみられるのも事実である。まず第1に、貴重な史料を発掘し、それを用いていながら、史料の読み込みと分析に甘さがみられる点、第2に、

遊郭や娼妓の生活を分析するにあたって、明治大正および昭和前期の日本社会の状況への認識に欠けるきらいがある点、第3に、遊郭の設置と軍隊の誘致の前後関係の分析に甘さがみられる点、などである。

しかしながら、申請論文のテーマは「近代日本における国家と性」という括りで言うならば、炭鉱労働者と売買春（例えば、大牟田の三井三池炭鉱の事例）、工場労働者と売買春（例えば水俣の日本窒素の事例）などへの展開が可能となり、「近代日本とアジア」というテーマに目を向ければ、からゆきさんや従軍慰安婦の問題など、多様な研究の発展の可能性を持ちうるものであることも事実である。こうした点を踏まえて、本審査委員会では、申請論文の水準が十分に博士（国際文化）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断する。

2020年2月14日

博士学位申請論文本審査委員会

主 査：片山 隆裕

副 査：中島 和男

副 査：宮崎 克則